くれなゐ(下)

渡辺淳一

集英社文庫

集英社文庫

くれなゐ（下）　0193-750571-3041

昭和57年11月25日　第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者　渡辺淳一

発行者　堀内末男

発行所　株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2－5－10
〒101

電話　東京（238）2842（編集）
（238）2781（販売）

印刷　中央精版印刷株式会社

著者と了解のうえ検印を廃します。（落丁本・乱丁本はおとりかえします）

© J. Watanabe 1982　Printed in Japan

集英社文庫

くれなゐ

(下)

渡池淳一

目次

春芽……六
行春……七二
病葉……一三一
冷夏……二〇一
朝顔……二五六
鶏頭……三一一
解説　川辺為三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

くれなゐ(下)

春芽

三日間、留守をしただけだが、帰ってくると、東京は急に春めいていた。
そろそろ、灯が点きはじめていたが、冬子は、自分が南国の暖かさを運んできたような錯覚にとらわれた。
原宿の店は休み中、とくに変わりはなかったようである。
「折角行ったんだから、もっとゆっくりしてくるとよかったのに」
真紀達はそんなことをいいながら、
「ママは誰と行ったのかって、みなで噂していたのよ」と探ることも忘れない。
「向こうに大学時代のお友達がいるって、いったでしょう、もちろん一人よ」
「どうかな」
女の子達は、にやにや笑っている。
「中山夫人も、怪しいって、いってたわ」
「夫人がみえたの？」
「昨日、新しいドレスを買ったので、また帽子がほしいんですって」
ありがたいお得意さまだが、夫人は口が軽い。貴志と一緒に行ったことを、変に勘ぐられなけ

ればいいがと、冬子は少し気が重くなった。
留守中にたまった仕事をそのままにして、部屋へ戻って掃除をしていると、船津から電話があった。
「帰っていたんですか」
「ええ、つい少し前よ」
「電話があるの、待っていたんです」
船津の声は不満そうだった。
「今日、これから会えますか」
丁度八時だった。福岡の街や太宰府を見て、夕方帰ってきたばかりで、少し疲れている。
「この前のことでお話ししておきたいことがあるのです。よかったら、これからそちらに行きましょうか」
船津がマンションにくると、また前のようなことが起こらないともかぎらない。
「あなたは、いまどこ？」
「四谷です、もう終わったから、どこにでも出て行けます」
「じゃあ、新宿ででもお会いしましょうか」
「駅ビルの上の、〝プチ・モンド〟という喫茶店はいかがですか、そこに八時半」
「わかりました」
冬子は受話器を置いた。
ようやく、部屋に戻ってほっとしたのに、また出かけるのは億劫だが、自分のために、船津が

いろいろ調べてくれたのを、無下に断わるわけにいかない。
やっぱり、あの手術はおかしかったというのだろうか……
冬子は憂鬱になりながら、どんなことがわかったのかと、気にもなった。
約束の喫茶店に行くと、船津はすでにきて、コーヒーを飲んでいた。
「いかがでした？　九州は」
「暖かかったわ」
「行くのなら、僕にいってくれるとよかったのに、案内するといったでしょう」
「でも、突然だったものですから」
「どこへ行ったのですか」
「宮崎と、福岡と」
「じゃあ、よかったでしょう」
「でも、お仕事でしたから」
「やはり帽子のですか」
「そうよ」
冬子は少しつまらなそうな顔をしてみせた。
「しかし、残念だったなあ。今度は、いつ行くんですか」
「もう、当分行かないと思うわ」
船津はうなずいてから、思い出したように、
「うちの所長が、いま福岡に行っているのですが、お会いになりませんでしたか」

「いいえ、知らなかったわ」
「たしか、一昨日から。まだ二、三日、福岡にいるはずです」
船津は、冬子が貴志と一緒だったことは知らないらしい。
冬子はほっとして、コーヒーを飲んだ。
船津は煙草に火をつけ、二服ほど喫ってから身体をのり出すと、
「お疲れのところ、こんな話はいやかもしれませんが、あの病院のことですが」
「またなにか、わかったの？」
「いろいろ医学的な面から調べてみました」
「……」
「二十代で、しかも未婚の人の、子宮を摘る場合は、極力慎重にするべきだ、という点では疑問の余地はありません」
「でも、本当に必要であったら、仕方がないでしょう」
「そこですが、あの病院に、初めて行かれたとき診てもらったのは、誰ですか」
「誰って……」
「院長というのは、長身のがっしりした人だったでしょう」
「そうですが、初めのときは、院長先生がいらっしゃらなくて」
「じゃあ、別の医者だったのですね」
「たしか三十前後の若い先生だったと思うわ」
冬子は初めに病院に行ったとき、診察してくれた医師を思い出した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

真面目そうだったが、産婦人科医にしては、少し若すぎて、頼りない感じだった。
「その医者、前原という先生じゃなかったですか」
「前原？」
冬子に医師の名前の記憶はない。
「一度、診ていただいただけですから」
「その若い医者に診察を受けたのは、いつでした」
「九月の中旬ですけど、くわしいことは、初診の日ですから、診察券を見れば、わかるかもしれません」
「じゃあ、今日帰ったらそれをすぐ見てくれますか」
「見ますけど、でもどうしてそのことが……」
「あの病院の院長は区会議員もやっていて、そちらのほうの仕事のため、ときどき休むらしいのです。それでそのあいだをカバーするために、大学病院から若い医師にきてもらっているのです」
「じゃあ、あのときの先生も……」
「多分、そうだと思うのですが、アルバイトの医師は三人くらいで、そのときどきに変わるようです」
「どこの大学の先生？」
「東日大学の産婦人科です」
船津はそこで手帳をとり出すと、

「その若い医者はなんて、いっていましたか」
「なんて？」
「やっぱり、子宮を摘るといってましたか」
「その先生はただ、筋腫だから、手術をしたほうが、いいだろうと……」
「子宮を摘る、とはいわなかったでしょう」
「でも、院長先生も、手術をしてみて、初めて、摘らなければいけないとわかったから、とおっしゃってたから」
「そりゃ、医者はなんとでもいえますよ」
「わたし、あの病院に行ったあと、心配になって、目白の病院へも行ったのです」
「その病院では、なんといわれたのですか」
「やはり、筋腫で、手術をしたほうがいいでしょうって」
「で、子宮は？」
「それは、なにも。ただ筋腫だから、それを摘れば、いいと」
「前の、若い医者と同じ意見ですね」
くわしくはわからないが、言葉のニュアンスは同じようであった。
「都立病院まで行って、どうして、そこでやってもらわなかったのですか」
「でも、都立病院は大きすぎて、病室もなかったものですから。同じことなら、近くて前に行ったことのある病院のほうが、いいと思って……」
「前にって、あの病院に前に行ったことがあるのですか」

「それはちょっと、友達のお見舞に行ったことがあるので」
冬子は慌てて誤魔化した。
「でもとにかく、初めの若い医者も、都立病院の医者も、子宮まで摘る必要はない、といった点では一致していたのですね」
「多分……」
冬子は次第に落ち着かなくなった。
たしかにいま考えてみても、代々木の病院の若い医師も、目白の産婦人科医も、子宮を摘るとは、いわなかった。
手術をしたほうがいいとはいったが、それはあくまで、筋腫だけを摘る、といういい方だった。
その点で、院長と、少し診方が違っている。
「すると、もう一度おききしますが、あなたを初めに診察したのは、若い医者で、手術をしたのは院長なのですね」
「そうだと思います」
手術の最中のことは、冬子にはわからない。麻酔をかけられて眠っていたが、手術前に院長が診察にきたし、終わったあと、子宮まで摘ったことを説明してくれたのも院長である。
「するとやはり、若い医者に当たってみると、そのあたりの食い違いがわかるな」
「その若い先生、ご存じなのですか」
「いや、僕は直接知りません。しかし僕の友達の先輩が、あの病院に行っていたことがあるらしいのです」

「じゃあ大学から？」
「そうです、院長が忙しいので、週に二度ずつ、小遣いかせぎのような形で行っていたようです」
「さっき、前原さんとかおっしゃいましたね」
「その医者が、アルバイトに行っていたなかの一人ですが、他にも二、三人行っていたようです」
「じゃあ、わたしを診てくださったのは？」
「その前原という人か、他の医者か、わかりません。でもそれは、あなたが診察を受けた日がわかればすぐわかります」
「……」
「とにかく、あの病院は、かなり儲け主義のいい加減な病院らしいのです」
「いい加減なんて」
「いや本当です。これは僕の友達が、その前原という医者からきいたのですから、間違いありません」
「でも、結構はやっているようですし、病院も立派ですし……」
「病院が立派だから、内容もちゃんとしているというわけではないんです。立派なら、かえって、どこかで不正をやっている、ともいえます」
「不正なんて……」
「いや、現在のような低い健康保険制度では、開業医は大なり小なり、過剰診察とか水増し請求

といった不正をやらなければ、なかなかやっていけないらしいのです。これは公立病院でも、ある程度やられているようです。ただ、あの病院はそれが特別ひどいらしい」

「……」

「それが不満で、友達の先輩はあの病院のアルバイトをやめたのです」

冬子は、コーヒーを飲んでからきいた。

「お医者さんが、お医者さんに、呆れたのですか」

「そうです。彼は若くて、まだ大学病院に勤めている医者ですから、一部の開業医の儲け主義に憤慨したのです」

「でも、あの病院がたとえ儲け主義だったとしても、それと、わたしの手術とは関係ないでしょう」

「それは、おおありですよ。この前、手術をして、手足の骨を接いでなおすのより、途中から切断してしまうほうが簡単だといったでしょう。それと同じ理屈で、子宮筋腫を摘るより、子宮全体を摘ってしまったほうが、治療としては完全だし、しかも簡単だというわけです」

「でも、全部まで摘る必要もないのに、そんなことを……」

「僕もそう思ったのですが、そんな乱暴なことをする医者が、いないとも、いえないらしいんです」

そんなことはありえないと思うが、船津のいうことに反論する根拠もない。

「しかもおかしなことですが、筋腫の摘出手術より子宮全摘出手術のほうが、手術料としてはるかに高いのです」

「お金が？」
「そうです。簡単でしかも儲かる。いってみれば、これはテレビのブラウン管が壊れたとき、ブラウン管だけをとり替えるか、新品のテレビを買うか、というのと同じ問題です。儲け主義の店は、なおりにくいとか、なんとかいって、新品のを買わせる」
「わたしの手術も、そうだったと、いうのですか」
「いや、それはまだわかりません。ただ、そんなことでないよう願っていますが、もしそうだったら、断固として、許すべきではないでしょう」
「……」
まさかと思いながら、船津のいうことが、次第に黒い影となって頭の中に拡がってくる。
「本当に必要であったかどうかは、その前原という医者に頼んで、あなたのカルテを調べてもらえば、わかるはずです」
冬子の脳裏に、再び院長の顔が浮かび、続いて若い医師が甦る。ちょっと話した感じからいえば、院長のほうが親切で、言葉づかいも優しかった。
それからみると、若い医師は冷たく、無愛想な感じがした。若いと思うせいか、よけいに頼り甲斐がなかったようである。
その無愛想な医師のほうが正しくて、気さくな院長のほうが不正だというのか……
医学の専門的なことはわからないが、少なくとも表面からはそうはみえなかった。
「とにかく、わたしには、どちらでもいいことです」
「そんな、投げやりなことをいわれては、困ります。手術を受けたのは、あなた自身ですから」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com